

独我論の現象学

渡辺 恒夫

東邦大学／明治大学

独我論の現象学の全体構想がほぼ成った。第1部は、「フッサー心理学」の技法を編み出しつつ「独我論的体験」を調査に基づき発生論的に遡り、「発達性エポケー」を「フッサー世界」へと位置づけるに至る経験的研究^{1,2}。第2部は、児童期の《私》がフッサー世界へ「第二の誕生」を遂げて以後、「自明なる間主観性の世界」に対抗して「現象学的反抗」によるオルタナティブな世界観を形成する過程を研究する「世界観形成の現象学」。第3部は、本研究の主語である《私》とは「誰」にとって妥当なのかという超越論的現象学。筆者の研究は現実には第2部が先行してしまったため^{3,4}、理解されないままになっているようだが、地道な調査の積み重ねと^{5,6}、フッサー現象学の心理学的技法化の工夫によって^{1,2}、ようやく第1部を完成したので報告する。

§1 発達心理学的問題としての独我論

【事例：デネット】もしかすると、(極端な場合を考えれば)あなただけがこの世のなかの唯一の心であるかもしれない。……この奇妙な考えは、幼かったわたしの頭にも浮かんだことがある。あるいは、あなたの頭にも同じことが浮かんだかもしれない。わたしの学生の三分の一ぐらいのものも、子どものころに同じことを考えつき、その考えにとりつかれてしまったと言っているが……

著名な認知哲学者デネット⁷の一節であるが、これを見ても、独我論とは子供が精神発達の過程で自発的に考えつき、大人になる前に忘れてしまう世界観であり、まず発達心理学上のテーマとして調査研究されるべき現象であることが分かるだろう。事実、そのような調査研究はすでに存在し、たぶん現在のところ日本にしか存在していない。

§2 シュピーゲルベルグの“私は私だ”体験から日本の自我体験・独我論的体験研究へ

1964年、現象学的哲学者のシュピーゲルベルグが‘I-am-me’ experience の名の下に先駆的な調査研究を発表した後は欧米では発展せず、日本で自我体験研究の名で展開している。次第に、独我論的体験研究へも拡大した。

【事例】⁸(ハイスクール生徒／女子)私は私だということに気がついたのは、5歳くらいのある日、何もしないでただ座っている時のことだった。私は、なぜ自分は誰か他の人ではなかったのかと、自問自答を始めた。この疑問はその後一週間ほど続いた。その後も時々浮かんだが、最近あまり浮かばなくなった。

【事例】⁹私は小学校に入る前くらいからずっと、自分以外の人は家族も友だちもみんなロボットで、私だけが人間なんだと思い込んでいました。みんなが私を監視していて、バスとかも私が見ている時だけ走っているけどそれ以外の時は動いてないんだと思っていました。この不信感はすごく根強くて、小学校の中学年か高学年くらいまでぬぐえなかったと思います。はっきりとおぼえてないけれど、多分親友と思える友だちができた頃からそういう妄想がなくなった気がします。

§ 3 フッサール現象学の心理学的技法化へ

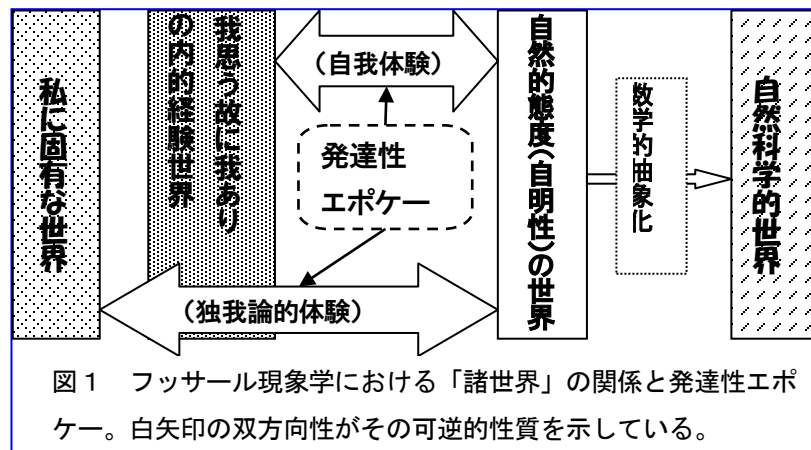
他者の独我論的体験は他者の体験であるという理由で論理的に誤謬となるので、体験事例テキストの「一人称的読み」によってテキストの著者を括弧入れするという、現象学的還元を方法としてしか、適切に研究できない。フッサール現象学は難解なので――

→フッサール現象学のフッサール心理学としての技法化へ（現象学的還元⇒一人称的読み。本質観取⇒内的体験の構造図解法、etc）²。

フッサール心理学によって自我体験・独我論的体験を分析したところ、発達性エポケー（developmental epochè）の概念に到達した^{1,2}。

§ 4 結論

現象学的還元を企図する哲学者でもなく、統合失調性エポケーに苦しむブランケンブルグ¹⁰の患者でなくとも、人格発達の過程で特に児童期に、「フッサール世界」を自然発生的に経験することが起こり



うる。これを発達性エポケーという。

§ 5 展望：世界観形成の現象学へ向けて

多くの子供はエポケー体験を成人前に忘れるが、憶えていて自明なる間主観性の世界と調和させようと空しい努力の末、いわゆるオルタナティブな世界観を形成する例がある。シュレーディンガーの「梵我一如」^{3,4}、稲垣足穂の「輪廻転生」^{3,4}、ハーディング¹¹の「無頭道」、6歳での自我体験の直後に「化身教義」を發明した「事例エミリー」²等。これらは、自然主義的事実としての間主観性への、「現象学的反抗」として解明可能である。

文献

- 1 Watanabe, T. (2011) From Spiegelberg's "I-am-me" Experience to the Solipsistic Experience: Towards a Phenomenological Understanding. *Encyclopaideia - Journal of Phenomenology and Education*, XV(29), 91-114/
- 2 渡辺恒夫 (2012) 「自我体験研究への現象学的アプローチ」*質的心理学研究*, 11, 116-130/
- 3 渡辺恒夫(1996)『輪廻転生を考える』講談社現代新書/
- 4 渡辺恒夫(2002)『<私の死>の謎：世界観の心理学で独我を超える』ナカニシヤ出版/
- 5 渡辺恒夫・高石恭子編(2004)『<私>という謎：自我体験の心理学』/
- 6 渡辺恒夫(2009)『自我体験と独我論的体験』北大路書房/
- 7 デネット『心はどこにあるのか』土屋俊訳、草思社/
- 8 Spiegelberg, H. (1964) On the 'I-am-me' experience in childhood and adolescence. *Review of existential psychology and psychiatry*, 4, 3-21. /
- 9 高石恭子 (2003) 「青年後期から若い成人期に想起された自我体験の考察」甲南大学学生相談室紀要, 11, 23-34. /
- 10 ブランケンブルク『自然な自明性の喪失』木村敏他訳、みすず書房、1978. /
- 11 ハーディング『心眼を得る』由布翔子訳、図書出版社、1994. (WATANABE Tsuneo)